

現代のことば

やまだ しょうじ
山田 奨治



それを言われると誰も逆らえない、魔法のことばが世の中にはある。現代の魔法のことばは、「環境」「福祉」そして「安心」だろう。商品やサービスに「安心」のキャッチフレーズがついていると、それを使うのがいいことで「安心」なのだ、わたしたちは思ってしまう。

子どもがどこに居るかを知るための、携帯電話の位置情報通知サービスや、鉄道改札を通り過ぎたときや塾に到着したときに、親にメールが届くサービスがある。これらのサービスを利用すれば、子どもの居場所が手に取るようにわかるので「安心」だという。

「安心」社会の終着駅

しかし、それらを利用すれば、ほんとうに「安心」なのだろうか？ ジョージ・オーウェルのSF小説『1984年』に似たような社会が描かれている。「ビッグ・ブラザー」という独裁者が支配する世界で、ひとびとの行動は常に機械で監視されている。そうした世界は暗黒だと、オーウェルは考えた。し

かしいまのわたしたちは、『1984年』的な世界を、「安心」という魔法のことばに惑わされて、受け入れてしまっていないか。あるいは、全能な神のように、子どもの居場所が手に取るようにわかることに、親は「安心」を感じるのだろうか。

子ども居場所がわかる利便性よりも、出会い系や学校裏サイトへの誘惑など、携帯電話を持たせる危険性のほうが問題ではないのか。駅の改札を通過し塾に到着した時間を知ること「安心」してしまつて、子どもと直に向き合い、悩みや希望を推し量る努力を、怠つてはいないだろうか。

『1984年』の独裁者から名前を取つた「ビッグ・ブラザー」という人気テレビ番組が、欧州の各国で放送されている。数人の若い男女が二十四時間テレビ・カメラの前で共同生活し、視聴者の投票で脱落者が決められる。そして最後に残った者に、多額の賞金と有名人への道が与えられる。

視聴者は他人の私生活を監視し、意にそぐわない人間をその世界から排除する。出演者は視聴者の人気を取るために、絶えず肌を露出して性的な魅力を露骨にアピールする。攻撃性をあらわにして注目を集める者もいれば、いじめられ役を演じて、姑息に同情を引く者もいる。ゲームから排除されないためには何をすればいいのか、出演者は監視者の期待に沿うキャラクターでいなければならぬ。

電子情報サービスで親に監視される子どもも、「ビッグ・ブラザー」とおなじ状況に置かれている。親との関係を保つためには、いつもの経路を時間とおりに歩いて、親の期待どおりの電子記録を残さなくてはならない。そういうプレッシャーを、子どもが感じてもおかしくない。気ままな道草もできずに育つた子どもは、人生で道草をすゝる意義や余裕も見いださないうろろ。理想のルートをはずれた他者を、排斥することにもなりかねない。それが「安心」社会の終着駅でないことを祈りたい。

(国際日本文化研究センター准教授・情報学)